

# 論文の内容の要旨

## 論文題目

### アラビア語版『サラーマーンとイブサール物語』の写本研究

— 古代末期からイスラームへの文化伝播に関する文献学的考察 —

氏名                    森            下            信            子

本論文は、アラビア語で書かれた二つの『サラーマーンとイブサール物語』に関する総合的研究である。『サラーマーンとイブサール物語』は、イスラーム世界で非常に人気のある研究テーマであり、現在もしばしばこの物語に関する研究書が出版されている。この名をもつ物語は数多く存在し、イスラーム思想史を通じて「サラーマーン」と「イブサール」が多くの知識人に靈感を与えてきたことがうかがわれる。この中で、本論文が対象とするのは、九世紀後半から十世紀に成立したと推測される物語（偽フナイン訳『サラーマーンとイブサール物語』）と、イブン・スィーナ（1037年没）の『サラーマーンとイブサール物語』の二つである。イスラーム世界にみられる『サラーマーンとイブサール物語』はすべて、この二つの物語のいずれかに遡及する。すなわち、本論文が対象とする二つの物語は、イスラーム世界の『サラーマーンとイブサール物語』の起源といえる。では、「サラーマーン」と「イブサール」という名そのものは、何に由来するのか。本論文は、この点にも重点をおいている。

本論文の最大の特徴は、写本を最大に活用した点にある。まず、本論文は、二つの物語の校訂テキストを提示する。偽フナイン訳『サラーマーンとイブサール物語』のクリティカル・エディション作成は、長く望まれてきたにも拘らず、誰も着手しなかった。また、イブン・スィーナの『サラーマーンとイブサール物語』は、これまで散逸したとされてきた作品である。ゆえに、本論文が示すこの二つの校訂テキストこそ、本論文の価値を最大に高めるものである。また、写本を用いることによって、出版されたテキストからは知ることのできないテキストの伝達者や、知識人の人脈・交流、人物名の綴りとそのバリエーション、テキストの成立過程など、物語にまつわる多くの外的要因が明らかとなった。思想研究では、通常、作品の思想そのものや、またそれを社会的要因との関連で論じるスタイルが主流である。本論文は、「思想内容の分析をおこなうためには、まずその基

礎となる原典の整備が必須」と考える立場から、思想研究で通常行なわれている方法に加え、そこに校訂テキストの提示、全訳と注釈、写本だけが伝えるテキストの外的要因等の分析を含めた。この意味において、本論文は、『サラーマーンとイブサール物語』の総合的研究と位置づけられる。

本論文のもう一つの特徴は、この初期の二つの『サラーマーンとイブサール物語』と、人物名の起源となったアラブの故事成語の間に、有機的つながりを見い出している点にある。通常、二つの物語やアラブの故事成語は、相互にまったく無関係な作品として扱われ、ただ共通の用語が指摘されるに止まっている。しかし、その共通の用語、すなわち、名そのものにこそ、これらの作品間のつながりを示す手がかりがある。本論文は、これを前提とし、この詳細を順を追って解説する。

本論文の構成は、五章から成り、詳細を以下とする。序章は、『サラーマーンとイブサール物語』の全体的な概説を行う。イスラーム期の文学の中におけるアラビア語版『サラーマーンとイブサール物語』の位置づけ、また、研究史の中における本論文の位置づけを示す。研究手法としては、写本校訂が中心であるため、校訂に関して本論文が採用した研究手法を記した。

第一章は、イブン・アル=アウラービーの『珍語集』とその故事成語を詳解する。第二章は、偽フナイン訳『サラーマーンとイブサール物語』を扱う。第一節で物語の主題を考察し、第二節では先行研究を検討する。先行研究における最大の要点は、「フナイン・イブン・イスハーク（873年没）が本当にこの物語をギリシャ語から訳したのか否か」という問題であり、筆者はこれを否とする。第三節は、写本解説として、第一部で資料解説を行い、第二部でテキスト伝達者を解説する。第四節は、偽フナイン訳『サラーマーンとイブサール物語』の校訂テキストを提示し、第五節は、その和訳と注釈を提示する。第六節は、物語の人物名と作品の成立に関与した人物について考察する。

第三章は、イブン・スィーナの『サラーマーンとイブサール物語』を扱う。第一節は、イブン・スィーナの寓意物語の全体像を描く。第一部で寓意物語の概観を示し、第二部でイブン・スィーナの著作群の中の寓意物語の特性、第三部で著者の生涯と寓意物語の関係をそれぞれ論じる。第四部で、先行研究を交えてイブン・スィーナの寓意物語の執筆動機を論じ、第五部で寓意物語の補完考察を行う。第二節は、『サラーマーンとイブサール物語』とイブン・スィーナの別の著作との関連性について論じる。第三節は、写本概説として資料解説を行う。第四節は、第一部で『サラーマーンとイブサール物語』の校訂テキストと和文対訳を提示し、第二部で『サラーマーンとイブサール物語』の注釈を示す。第五節は、『サラーマーンとイブサール物語』のテキスト伝達について論じる。

第四章は、ナスィール・アッ=ディーン・アッ=トゥースィーの『指示と勧告の書注釈』を扱う。第一節で、トゥースィーの『指示と勧告の書注釈』と『サラーマーンとイブサール物語』との関係を論じる。第二節は、トゥースィーの『指示と勧告の書注釈』の資料を詳説し、各成立年代を示す。第三節では、『サラーマーンとイブサール物語』の伝達関係について論じ、その補記として『サラーマーンとイブサール物語』の関連著作をリストに挙げる。このリストは完全ではないが、二つの『サラーマーンとイブサール物語』がイスラーム期の文学に与えた影響の大きさを俯瞰できるものである。

終章は、結論として『サラーマーンとイブサール物語』の伝達関係図を示し、その解説を行う。尚、本要旨の次頁にも、同様の伝達関係図を示しておく。巻末には、今回博士論文執筆のために収

集した写本を CD-ROM にして付した。

本論文の思想史的成果は、以下の通りである。まず、偽フナイン訳『サラーマーンとイブサール物語』は、アラブの故事やヘルメス主義など、古代末期文化の多様な影響を受けた作品であることを明示する。そこでは、バビロニア、ペルシャ、エジプトなどの個性ある各文化は、すでに見分けがつかないほど複雑に融合している。また、イブン・スィーナに受け継がれた『サラーマーンとイブサール物語』は、彼の救済論の表明であると同時に、先行文学の「本歌取」でもある。すなわち、アラビア語版『サラーマーンとイブサール物語』は、一つのモチーフと二つの言葉が、イスラーム以前の時代からイスラーム期に受け継がれ、イスラーム文化と親和しながら変容を遂げた作品の一例と評価される。また、本論文は、今後の『サラーマーンとイブサール物語』研究の確固たる基礎を確立した。今回得られた『サラーマーンとイブサール物語』に関する多くの新しい見地に基づいて、今後、さらに考察が深められることが望まれる。

結論 『サラーマーンとイブサール物語』の伝達関係図

[ ] は成立年代、( ) は伝達年代を指す。

The Arabic Tales of “*Salāmān and Ibsāl*”

The Arabic proverb “khalāṣ salāmān wa ’ibṣāl ṣāhibi-hi”  
[noted in *al-Nawādir* by Ibn al-A‘rābī in the early 3<sup>rd</sup>/9<sup>th</sup> cent.]

